

## 第 26 回 IAPH 総会—総括報告

国際港湾協会 事務総長  
井上聡史

### はじめに

第 26 回 IAPH 総会は、さる 5 月 25 日から 29 日の 5 日間、イタリアのジェノバで開催されました。ヨーロッパ地中海地域での開催は、1991 年にスペインのバルセロナで第 17 回総会を開催して以来であり、世界約 70 カ国から 700 名を超える港湾人及び同伴者が参加しました。経済不況が各港湾の活動に深刻で大きな影響を与え、また新型インフルエンザが世界各地に拡大するなど、多くの不安材料を抱える中での開催でしたが、幸いにも成功裏に終了することが出来ました。とくに日本からは国土交通省の中尾成邦 技術総括審議官をはじめ 50 名近い方々にご出席頂きました。皆様のご参加ご支援に深く感謝申し上げます。

### 1. 総会の概要

今回の IAPH 総会の舞台ジェノバは、2600 年余の長い歴史をもつ地中海の港湾都市です。世界遺産にも指定された街並みは、豪商達の堂々たる石積みの館が立ち並び参加者を圧倒しました。ポルト・アンティコと呼ばれる内港一帯は、ジェノバ出身の大航海家コロンバスのアメリカ大陸発見 500 周年を記念する行事の一環として、当地出身の世界的な建築家レンゾ・ピアノの計画に基づき 1992 年よりウォーターフロント再開発が進められ、大きな賑わいを見せていました。この総会の会場も、彼の手により 19 世紀に綿花輸入の拠点として活躍した大規模な倉庫を保存修復し国際会議場として再生したものです。

また、前回 2007 年のヒューストン総会までは 7 日間の会期で開催してきましたが、このジェノバ総会より月曜から金曜までの 5 日間に短縮した新しいフォーマットで開催することになりました。不慣れなこともありご迷惑をお掛けした点も少なくなかったと思いますが、現在進めている参加者へのアンケート調査の結果も踏まえて、今後さらに改善を加えていく所存です。

- (1) 会期： 2009 年 5 月 25 日(月)–5 月 29 日 (金)
- (2) 会場： イタリア国ジェノバ市 Cotone Congressi Genova
- (3) テーマ： **Oriented to the market-Open to the future**／市場と向き合い—未来へ向かう
- (4) ホスト： ジェノバ港湾局
- (5) 参加者： 約 70 カ国、約 700 名(同伴者を含む)

### 2. 役員（任期：2009 年～2011 年）の選出

新しい会長にはケニア港湾庁のギチリ ドゥア部長が選出され、IAPH として初めてアフリカ地域から会長を迎えました。また各地域を担当する副会長には、通常は持ち上がり選出となるのですが、アメリカ地域より選出され第二副会長であったサウスキャロライナ州港湾庁のグロースクロス長官とアジア・オセアニア地域より選出され第三副会長であったシンガポール海事港湾庁のテイ長官がともに急遽各組織を去ることになった結果、三地域とも新しい顔ぶれとなりました。

その結果、アメリカ地域からはロサンジェルス港のジェラルディン・ナッツ局長、アジア／オセアニア地域からはシドニー港のグラント・ギルフィラン局長、欧州／アフリカ地域からはバルセロナ港のサンティアゴ・ミラ次長がそれぞれ選出されました。さらに、1999 年以来 10 年間事務総長を務めてきた井上が 2009 年 11 月末に退任することが承認され、後任として成瀬 進氏（(財)国際臨海開発研究センター常務理事）が任命されました。

会長： Mr. Gichiri Ndua (ケニア、Kenya Ports Authority)  
第1副会長： Dr. Geraldine Knatz (米国、Port of Los Angeles)  
第2副会長： Mr. Grant Gilfillan (豪州、Sydney Ports Corporation)  
第3副会長： Mr. Santiago Mila (スペイン、Barcelona Port Authority)  
直前会長： Madam. O.C. Phang (マレーシア、元 Port Klang Authority)  
総会副会長： Mr. Ki Tae Roh (韓国、Busan Port Authority)  
事務総長： 井上聰史 (2009年11月30日まで) 成瀬 進 氏 (2009年12月1日より)

### 3. ワーキングセッション

港湾経営者や専門家にとって今日最も関心の高い五つテーマについて、セッションごとに世界の最新の動きや将来の見通しについて、価値ある情報とともに35名に及ぶ世界第一級の講師から講演がなされました。このときの発表資料等については、IAPH ホームページ上でIAPH 会員向けに公開しています。<http://www.iaphworldports.org>

- (1) セッション1： グローバリゼーションの挑戦
- (2) セッション2： 港湾運営とその戦略
- (3) セッション3： 保安・安全・環境保全
- (4) セッション4： グローバル・ロジスティクスと港湾
- (5) セッション5： 未来の港湾－技術革新とコミュニティ

### 4. 二つの決議

また、世界の港湾界が直面する喫緊の課題についてIAPH として次の二つの決議を採択しました。

#### (1) 世界経済の回復に備える世界の港湾

世界の港湾は経済不況に起因する深刻な貿易の減少傾向の影響を受けているが、ひとたび世界経済が回復すれば直ちに供給能力不足に陥るのは疑問の余地がないため、IAPH は世界の港湾が能力の増強と効率性の向上に向けて継続的な投資を進めることを強く求める。また、その投資を通じて世界経済の早期回復に寄与するものである。とくに途上国港湾に対する資金協力に国際社会が大きな配慮をするよう求める。

#### (2) 気候変動対策を急ぐ世界の港湾

気候変動問題の国際的な解決に向け温室効果ガスの削減に取り組むことが喫緊の課題である。IAPH は、昨年11月に立ち上げたWorld Ports Climate Change(WPCI、世界港湾気候イニシアティブ)に世界の港湾が積極的に参加することを通して、統合的・革新的な方法で港湾の温室効果ガス削減を図ることを強く求める。また、海面上昇や異常気象など気候変動が港湾にもたらす影響に対処するため、港湾のインフラ整備において積極的な方策を講じるよう求める。

### 5. 専門委員会の取り組み

現在設置されている8つの専門委員会は2009/2011年においても、それぞれ国際港湾界の主要な課題に積極的に取り組むことが決定しました。委員長及び副委員長の見直しが行われるとともに、各委員会の行動計画の詳細が審議、決定されました。

### 6. 2011年第27回総会の紹介

すでに2007年のヒューストン総会において、2011年の総会を韓国の釜山港で開催することは決定しています。今回は、それに向けて準備が始まっている釜山港より、総会の会場となる施設や宿泊ホテルそして市内観光の見所などが紹介されました。

### 7. 2013年第28回総会開催地の決定

2013年の総会はアメリカ地域の順番になりますが、IAPH 誕生の地、米国西海岸のロサンゼルス港で開催することを決定しました。今回、第一副会長に選出されたジェラルディン・ナッツ局長のお膝元での開催となります。

附：『IAPH 事務総長としての 10 年間を振り返る』・・・井上聰史

1. 1999 年 5 月にマレーシアのクアラ・ Lumpur で開催された第 21 回 IAPH 総会で、当時の故日下 宏 事務総長を引き継ぐよう任命され、今年 2009 年 5 月のジェノバ総会でちょうど満 10 年目を終えることが出来ました。これも偏に皆様のご指導とご支援の賜物であり、心よりお礼を申し上げます。
2. 日本が創設した国際団体の運営という重責でしたが、歴代の協会会長や副会長等の暖かい指導と本部事務局の職員の協力に支えられ、ひたすら IAPH の発展を考えながら一生懸命に走り続けて来ることが出来ました。本当にアツと云う間の 10 年でありました。また大変に挑戦的な 10 年でありました。こうした経験を与えて頂いたことに深く感謝しております。
3. IAPH という組織は、各国港湾主務官庁の後ろ盾があるわけでもなく、世界の港湾や企業、団体の文字通り自発的な参加意欲によって支えられた団体です。運営はすべて会費収入で賄われています。それだけに IAPH の存在意義を国際的に認知させ、会員にとっての価値を高めていく協会の活動が不可欠な訳ですが、云うに易く行うに難いことではありました。
4. 幸いにも、IAPH の活動の意義を高く評価する港湾人が少なからず世界の主要港湾の重職に就いています。この事実は、終戦直後に日本港湾協会の松本 学 会長を中心とした日本の港湾界が世界に IAPH 創設を提唱し、そして 50 年を越える決して平坦でないその後の道程を頑張ってきた大変な努力が決して無駄でなかったことを如実に物語っています。
5. この 10 年だけをとっても、IAPH は、港湾民営化の本格的な進展、同時多発テロを契機とした港湾やサプライ・チェーンの保安強化、地球温暖化と温室効果ガスの削減、国際ロジスティクスの進展と港湾戦略など国際的な諸課題に次々と取り組んできました。IAPH があったからこそ、これらの問題に世界の港湾社会が一致結束して解決にあたり、また国連を通して港湾にとって実効性のある新しい条約や枠組みを構築できたと云っても過言ではありません。
6. と同時に、IAPH は専門委員会の体制を見直し、より効果の上がるように再編も実施しました。各委員会の活動を事前に綿密に検討するため個別に作業計画を策定することとしました。また地球上の各地に散らばる IAPH 会員の連携を図るため、会員組織に IAPH Coordinator 制を導入する一方、Ports & Harbors の刷新、Online Newsletter の隔週発行、Website の機能強化などにも、積極的に取り組んできました。
7. さらに日本の港湾界が IAPH 活動に積極的に参画し、その成果を日本の港湾の発展に役立てていくため、2003 年に「IAPH 日本会議」を立ち上げました。また港湾関係の諸団体には IAPH 専門委員会への日本委員の参加を支援して頂いております。この結果、日本の港湾人の評価が高まり、また IAPH 活動の成果が国内へ徐々に浸透しつつあると思います。
8. 個人的な思い出は尽きませんが、なかでも特に大きく印象に残る事柄がいくつかあります。
  - (1) 本部事務所の移転
  - (2) IAPH50 周年と記念行事のグローバル展開
  - (3) Ports & Harbors に事務総長“Comment”を連載執筆
9. 私自身に残された時間は多くありませんが、本年 11 月末まで精一杯務めて参ります。また 12 月からは成瀬新事務総長のもとで新たな路線が力強く始まります。どうか引き続きのご支援と、IAPH 活動への積極的な参画をお願い申し上げます。日本の港湾が再び我が国の経済・国土づくりに逞しく挑戦し、国際的な発信力をより高めていくことを切に祈念致します。